



Abdul Rahman Embong, ed., *Globalization, Culture & Inequalities: In Honor of the Late Ishak Shari*. Bangi, Malaysia: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia, 2004, 418p.

この本は2001年に53歳で急逝したマレーシア国民大学 (Universiti Kebangsaan Malaysia) のマレーシア・国際研究所 (Institute of Malaysian and International Studies) 所長イシャック・シャリ (Ishak Shari) 氏の追悼論文集である。本のタイトルはイシャック氏が取り組んだ研究テーマで、その内グローバリゼーションはマレーシア・国際研究所が取り組んでいる中心的な研究テーマにもなっている。

この本は5部構成になっており、第1部は *Discourses on globalization* (グローバリゼーション総論)、第2部は *Country responses to globalization* (グローバリゼーションへの国の対応)、第3部は *Income distribution, poverty and income inequality* (所得分配、貧困、所得格差)、第4部は *Globalization, industrialization and competitiveness* (グローバリゼーション、工業化、国際競争力)、第5部は *Knowledge, culture and politics* (知識、文化、政治) となっている。各部に3ないし4論文、全部で17論文が収録されている。執筆者の多くはマレーシア人研究者であるが、イシャック氏と関係の深かった外国人研究者5人 (日本、タイ、ドイツ、アメリカ、オーストラリアから各1人) が含まれている。

この本の編集者はイシャック氏の同僚で学生時代からの友人でもあるラーマン氏であるが、彼が序論で本の主旨を説明し、収録された各論文を簡単に要約しているので、まずそれを読んで、興味ある論文を読むことを薦めたい。

この本の執筆者はグローバリゼーションには肯定的だと理解してよかろう。イシャック氏も、またこの本の編集者であるラーマン氏もこのような立場をとっている。ただ彼らはグローバリゼーションの恩恵が不平等であることに問題があるとする。これは市場経済批判に似たような問題で、市場経済が自己責任の原則に基づいている限り、取り残される人もいれば恩恵を受ける人もいる。市場経済国がグロー

バリゼーションに巻き込まれれば、経済はより競争的になり、所得格差はさらに拡大されることになる。また、グローバリゼーションを自国経済の発展に利用できる国とできない国に分かれ、国と国との経済格差も拡大する。この本の執筆者の多くはこのようなグローバリゼーションに否定的である。

それではどうしたらよいかということになると執筆者の意見は分かれる。エンボン、ジョモ両氏はマレーシアを代表する社会学者であるが、彼らは「福祉国家的」な国際経済をつくるのが解決策だと考えているようである。市場経済批判が20世紀前半に噴出し、なかには共産主義国になった国もあるが、そういう選択をしなかった先進国は同世紀中頃福祉政策を重視し、市場経済を「人に優しい」(people-friendly) 経済にする努力をした。しかし1980年代になると経済成長が再重要視されるようになり、福祉政策の必要性を否定するのではないが、自己責任と国際競争力を強調する経済イデオロギーが優勢になってきた。こういう流れの中で、国際経済を「福祉国家的」にすることに主要国は現在否定的である。それはまた世界の主要国が国内に深刻な経済問題を抱えており、他国にあまり経済援助できるような状態ではないことも原因になっている。

問題はグローバリゼーションを自国の経済発展に利用できる国とうまく利用できない国に分かれることであるが、それではなにが両者を分けているのであろうか。例えば日本は問題を抱えているにしても、これまでグローバリゼーションでの恩恵を受けてきた国である。ところが東南アジアにはフィリピンのように何年経っても経済発展しない国がある。マレーシアは一人当たり GNI が4,000ドルに到達した発展途上国の優等生ではあるが、それ以上は所得水準が上昇しない。それはこのような発展途上国が自国の文化、言語でグローバリゼーションに対応できないからなのではなかろうか。

そうするとグローバリゼーションの問題は発展途上国側にあるということになる。しかしこういう自己批判的な観点よりも、国際経済の仕組みに問題があるとする方が発展途上国では受け入れられやすいし、先進国の市場経済批判者にも支持されやすい。この本の執筆者の多くはこのような観점에立脚しているように思われる。たしかに国際経済の仕組みを改善することが解決策であるかもしれないが、その

実現は非現実的であるので、そのような理想論を展開してみても、それはグローバリゼーションを自国の経済発展に利用できない国にとってあまり建設的ではない。現実的な対応を考える上で、グローバリゼーションを利用できる国とできない国はどう違うのかという研究が必要であるが、そのような問題を扱った論文は残念ながらこの本の中では少ない。

グローバリゼーションは東南アジアのような発展途上地域に難しい問題を投げかけている。それはグローバリゼーションが標準化のプロセスであり、これが進むと国のアイデンティティの基盤になっている固有の文化が失われる危険性があるからである。そういう危険性があるからと言ってグローバリゼーションに否定的になるのは建設的ではないので、グローバリゼーションを進めながらいかにして文化を守るかが大きな問題になるのである。このような関係があるため、文化がこの本の主要テーマの一つになっているが、グローバリゼーションと文化の関係をとり上げている論文は少なく、グローバリゼーションと所得不平等、ないしは格差の問題を取り上げた論文の方がはるかに多い。もう少し文化との関係を取りあげた論文が多かった方がバランス上良かったように思われる。

東南アジアは孤立した地域ではない。グローバリゼーションが進む世界の中の一つの発展途上地域である。しかしグローバリゼーションがどのような問題を東南アジアの個別の国に投げかけているのかということ进行分析する研究は比較的少ない。この本がそのような研究を進めるきっかけになってくれればと願っている。

(吉原久仁夫・北九州市立大学国際環境工学部)

Anna M. Gade. *Perfection Makes Practice: Learning, Emotion, and the Recited Qur'an in Indonesia*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2004, xii + 348p.

1990年代、インドネシアではイスラーム復興の潮流の中で大規模なクルアーン（コーラン）読誦学習の高まりが見られた。本書は、アメリカの人類学者アンナ・M. ゲイド（Anna M. Gade）が1996-97年にスラウェシ島のマカッサルを中心におこった

現地調査に基づいて、この時期のインドネシアにおけるクルアーン読誦学習の社会的・個人的ダイナミズムを人類学的・教育学的方法論によって分析した意欲的な民族誌である。著者は現在アメリカのオーバーリン・カレッジの宗教学部で教鞭をとっており、本書が最初の著書である。本書は以下の6章から成っている。

- 第1章 序——実践と熟練
- 第2章 暗記——クルアーン保持のためのいきとどいた諸様式
- 第3章 読誦——心をとらえる基礎的学習
- 第4章 表現——情動にかかわるプロジェクトとしての実演と教授法
- 第5章 競争——動機付けと参加の促進
- 第6章 結論——上手さへの羨望

著者はクルアーン読誦実践を、(1)テキストの暗記、(2)テキストの発声、(3)芸術的表現力、(4)他者との競争、といった4つの側面から分析する。2-5章がそれぞれこの4側面の分析に当てられている。題名の *Perfection Makes Practice* とは、著者によれば読誦の存在論的完全性と技術的・道徳的熟達という2つのレベルの perfection への欲求こそが、人びとを継続的な実践 practice へと駆り立てるといふ説である。この理論に基づいて読誦の4側面を分析することによって、「なぜ人は特定の行為を文化的に重視し実践するのか」という普遍的な問いへの1つの答えを提示しようとしている。

聖典であるクルアーン読誦はイスラーム世界においては最も重要な信仰行為であり、読誦時の作法やその宗教的意義、音楽との境界などをめぐって歴史的にさまざまな議論が展開されてきた。読誦の規則については読誦学（イルム・アル＝キラーア）[堀内 1971] という学問分野が発展した。しかし、非イスラーム世界におけるクルアーン読誦研究の歴史は浅い。ギアツ [Geertz 1976]、アイケルマン [Eickelman 1978]、マーティン [Martin 1982] などの研究の中で触れられているほか、イスラーム初期における読誦を扱ったジャインボル [Juynboll 1974] や、伝統的読誦の展開やインドネシアにおける実践を扱ったデニー [Denny 1980; 1988; 1989]、読誦学を体系的に研究した堀内 [1971] などがあ

る。一方、現地調査に基づき実際の実践を対象としたものは、ダマスカスとアルジェで録音されたデータをもとに読誦の音楽的側面を研究したカンティノー&バルベス [Cantineau and Barbès 1942-47] を除けば、本格的な研究は1985年のネルソン [Nelson [1985] 2001] が先駆的であろう [小杉 2004]。

ネルソンは1970年代にエジプトにおいて調査をおこなない、国際的な読誦家へのインタビューや読誦訓練への参与観察を通じて、初めてクルアーン読誦の世界を本格的に叙述することに成功した。ネルソンの限界性の1つは、読誦を規範的にのみとらえ、一般信徒の主体的実践としてとらえられなかったことであるが、ゲイドは読誦実践にスハルト体制下でおこった1つのムーブメントという枠組みを与え、広範な一般信徒の主体的参加を引き起こした読誦学習の実態、内容、仕組み、制度を分析の対象とすることによってネルソンの限界性を大きく乗り越えた。ゲイドは、ギアツ、デニー、ネルソンに対して、自分のスタンスを以下のように述べる。

この研究が関心を寄せているのはインドネシアの熟練した読誦家だけではない。私の主たる関心は、普通のインドネシア人ムスリムにとってクルアーン読誦実践が持つ教育的、実生活的、心理的側面であり、特に、信心を高めるための個人の取り組みの中で、また地域的・国家的・国際的なイスラーム「覚醒」の運動の中で、読誦実践が持っている求心性である。

(p. 25)

ゲイドは実践の過程で生じる情動と精神面に及ぶ習得がクルアーン読誦実践を推進し、実践者としての自己認識を決定していると分析する。情動はまず、個人と社会の両レベルにおいてテキストを記憶の中に保持すること＝暗記への配慮として姿を現す。クルアーンテキストを記録・保持・伝達する第1媒体は文字ではなく人間の記憶であり、広くイスラーム世界にはクルアーンテキスト全文を正確に暗記している「ハーフィズ」と呼ばれる人びとが存在する。このハーフィズたちが自らの記憶と道徳性を維持・管理することを通じて社会はテキストを保有する。ゲイドはこの様式をフーコーの「自己の

テクノロジー」を援用しながら「共同体のテクノロジー」と名付け、そこにおける情動の管理と情緒への配慮を分析する(第2章)。次いで、非母語であるアラビア語の音読・発音と読誦規則(タジュウィード)の学習・教授を通じて「学習者のアイデンティティ」が形成されることを指摘している(第3章)。

では、人びとはなぜこれらの読誦のための活動に邁進するのか。この問いへの答えが読誦の旋律の様式と読誦コンテキストの分析を通じて、技術と理念の両方における「完全性への希求」として描き出される(第4、5章)。

本書はネルソンの切り拓いた分野の素朴な継承ではない。以下の2点において本書は画期的かつ刺激的で、他の研究者に対して訴えかける力を持っている。第1に、読誦の東南アジア的展開という新しい視角を確立した点である。読誦研究にはしばしばアラブ中心主義的な発想がつきまとい、ネルソンが本場であるエジプトの読誦を対象としたのは、ある意味では当たり前のことであった。それに対し、読誦研究の地域的視野をインドネシアにまで広げ、非アラブ圏における独自の展開を分析しえたのはゲイドの功績であり、さらには今後インドやパキスタンなど南アジアやサハラ以南のアフリカなど、ほかの地域についても本格的な調査がおこなわれることを期待させるものである。しかも、インドネシアは現在最大のムスリム人口を有しながら、イスラームの観念の研究が少なかった事実を考慮すると、ゲイドの功績の大きさは強調されるべきであろう。

第2に、理論的な洗練の著しさである。ネルソンは民族音楽学を主たる方法論としたが、理論的な展開は単純であり、民族音楽学者からの批判もこの点に対してなされた [Qureshi 1989]。それに対し、ゲイドはサルトルやフーコー、ブルデュー、メルロ＝ポンティらの視点を積極的に援用し、人類学における儀礼理論も重点的に押さえ、議論の幅を格段に広げている。レイヴに代表されるような認知心理学の学習理論を援用しているところも特徴的である。理論の有効性の検証は今後の課題であるが、読誦に関心を持つ研究者だけではなく、広範な研究者に対して高いアピール力を持つことに成功しているだろう。

さらに、フィールドワークの充実ということも付

け加えられる。時折、著者とインフォーマントとの間の交感、著者に対する彼らのまなざしのようなものが叙述の中に垣間見られることが印象的である。たとえば、サウディアラビアで開催された読誦大会に参加した人物が、そこで出会った非常に背の高いモロッコ人について、「ムバッ・アンナ [著者のこと] よりも高かったよ」と語った言葉を引用しながら、「実際私は背が高い」というコメントを加えている箇所などは微笑ましい。

これらの魅力に対して、逆に本書に足りないのが、読誦の専門家や教師ではない学習者の姿である。読誦学習の生徒や参加者へのインタビューは意外にも少ない。ネルソンのインタビューが国際的に著名なプロの読誦家に限られていたのに対して、ゲイドはインドネシアのトップクラスの読誦家だけではなく、地元レベルの教師へもインタビューをおこなっている点で広がりを持っているが、学習の受け手側の主体的な認識や経験をとりこむには至っていない。

インドネシアではプサントレン（宗教学校）を拠点として、子どもたちの読誦学習が非常に盛んである。彼らが何歳くらいから、どのような経緯でプサントレンに入学し、何を目指して努力しているのか、読誦学習を中心とした生活の中で何を感じているのかといった具体的な学習者の姿が今後明らかにされていくことが望まれる。

ゲイドは1990年代のインドネシアにおけるムーブメントとして読誦実践を描き出した。その段階に至るまでのインドネシアにおける読誦実践の歴史的展開は、歴史資料をもとに第1章の中で簡潔にまとめられているが、後半の議論の豊かさに比べると物足りなさを感じる。もっとも、読誦の歴史叙述は困難な課題である。読誦を読誦規則や制度からではなく、音楽性や実践性に着目して研究しようとした途端、歴史的にほとんどさかのぼれなくなってしまうことは、すでにネルソンが指摘している。しかし、そこに至るまでの歴史的展開を十分に知りたいと思うのは研究者として当然の欲求である。読誦実践を短期間の地域的な現象としてだけでなく、広範な地域にまたがった長期的な現象として描き出すための歴史研究がどのように可能なのか、困難であると同時に魅力的な課題であろう。

本書では、読誦学の規則にのっとった「読誦」を

対象としているが、実際にフィールドで出会う実践には、規則から外れた一般信徒の「朗唱」も多く、さらには章句がつぶやきや日常会話の中に組み込まれていることもある。プロが読誦や朗唱を実演したり、訓練するだけでなく、一般信徒が受容者としてプロやアマチュアの実演を鑑賞したり、カセットに録音されたものをBGMとして聴くこともある。たとえば、エジプトの作家ターハー・フサイン [フサイン 1973] が自らの少年時代の思い出として綴り、マレーシアの作家クランタン [クランタン [1990] 1998] が1人の青年の母への慕情の象徴として描いた読誦の記憶など、文学作品に表されるような体験がある。また、評者がフィールドで出会った体験でいえば、部屋に籠もってクルアーンを誦みふける思春期の少女の心理や、亡き親友への祈りの言葉が書かれた「ヤースィーン章」の小さな冊子を身につけ、「ヤースィーン章」が心の導きだという女性の語り。そのようなものを加味しうるような方法論をどのように構築していくのか。

確かに、規範性があり制度や教育としての実体を持つ読誦は、朗唱や他のクルアーンに関する実践に比べ可視的で認識しやすい。クルアーンが口誦性を強く持っているにもかかわらず、従来文字テキストとしてのみ研究されてきたことを批判したネルソンやセル [Sell 1999]、ゲイドたちは迷うことなく読誦に着目し、あるいは研究対象としてきた。それは「インドネシアの日常生活の中のクルアーン」という視点を持ったラスムッセン [Rasmussen 2001] においても同様である。しかし、クルアーンを体現するものは、イスラーム社会の中で五感のすべてにかかわる多種多様な形態で展開しており、その実践は誦むこと・聴くことだけではない。読誦に関する充実した民族誌が刊行され、読誦への認識が高まりつつある中で、今度は日常会話や祈りのつぶやきの中にクルアーンを聴き、種々のグッズの形に表現された章句を読み、本当の意味で「日常生活の中のクルアーン」に肉迫していくことが必要とされるだろう。

本書は読誦研究の境界を拓き、優れた功績をあげた。本書の成果を受けさらに今後は、上に触れたように学習者に焦点を当て、彼らの視点を取り込んでいくことが分野全体にとっての課題である。読誦研究を志す者にはいうまでもなく必読書であるが、イ



ンドネシア, 東南アジアに限らず, 他の地域を対象にイスラーム研究をおこなっている人びと, さらには人類学や教育心理学, 認知心理学など幅広い分野の人びとにお薦めしたい1冊である。

参 照 文 献

日本語文献

- 堀内 勝. 1971. 「QIRĀ'AH (コーランの読誦) に関するノート」『アジア・アフリカ言語文化研究』4: 189-231.
- フサイン, タハ. 1973. 『歳月の流れ』田村秀治(訳). ジュセップ出版.
- クランタン, S. オスマン. [1990] 1998. 『ある女の肖像』加古志保(訳). 大同生命国際文化基金.
- 小杉麻李亜. 2004. 「ネルソン *The Art of Reciting the Qur'an*」『文化人類学文献事典』小松和彦他(編), 550ページ所収. 弘文堂.

欧語文献

- Cantineau, Jean; and Barbès, Léo. 1942-47. La récitation coranique à Damas et à Alger. *Annales de l'institut d'études orientales* 6: 66-107.
- Denny, Frederick M. 1980. Exegesis and Recitation: Their Development as Classical Forms of Qur'anic Piety. In *Transitions and Transformations in the History of Religions: Essays in Honor of Joseph M. Kitagawa*, edited by Reynolds and Ludwig, pp. 91-123. E. J. Brill.

- \_\_\_\_\_. 1988. Qur'an Recitation Training in Indonesia: A Survey of Contexts and Handbooks. In *Approaches to the History of the Interpretation of the Qur'an*, edited by Andrew Rippin, pp. 288-306. Clarendon Press.
- \_\_\_\_\_. 1989. Qur'an Recitation: A Tradition of Oral Performance and Transmission. *Oral Tradition* 4(1-2): 5-26.
- Eickelman, Dale F. 1978. The Art of Memory: Islamic Education and Its Social Reproduction. *Comparative Studies in Society and History* 20(4): 485-516.
- Geertz, Clifford. 1976. Art as a Cultural System. *MLN* 91: 1473-1499.
- Juynboll, G. H. A. 1974. The Position of Qur'an Recitation in Early Islam. *Journal of Semitic Studies* 19: 240-251.
- Martin, Richard C. 1982. Understanding the Qur'an in Text and Context. *History of Religions* 21(4): 361-384.
- Nelson, Kristina. [1985] 2001. *The Art of Reciting the Qur'an*. The American University in Cairo Press.
- Qureshi, Regula Burckhardt. 1989. Book Review: The Art of Reciting the Qur'an. *Ethnomusicology* 33(3): 522-527.
- Rasmussen, Anne K. 2001. The Qur'an in Indonesian Daily Life: The Public Project of Musical Oratory. *Ethnomusicology* 45(1): 30-57.
- Sell, Michael. 1999. *Approaching the Qur'an: The Early Revelations*. White Cloud Press.

(小杉麻李亜・立命館大学先端総合学術研究科)